

一八八三年五月二十日(日)

ラーム・チャンドラの家における聖ラーマクリシュナとハリ讃歌

次の日曜日、ラーム・チャンドラの家でまた讃神歌キールタンが催された。クマトウラーの歌々である。タクルはそこに行かれた。ポイシャク白分十四日、ジヨイスト月七日。

クマトウラーの歌々が始まり、美しい聖シュリー・マテイ女ラーダーは、クリシュナと別れたことを友達に向かつて綿々と嘆いているところである。

小さいころから私は、あの方に会うのが大好きだった。

まあ、見ておくれ。私の爪は、会う日を指折りかぞえてすり減ってしまったの。

ね、見ておくれ。あの人が賜たまってくれた花の首飾り。とつくにしおれてしまったけれど、捨てないで大事にしまつてあるわ。

クリシュナの月はいったい何処どこに昇つたのかしら？ あ月の月は怒りのラーフを怖れて、ここからいなくなつてしまつたのよ！ ああ、クリシュナは雲にかくれて、またいつの日会えることやら。(訳

註、ラーフ—太陽と月をたべて蝕を起こすというヒンドウ神話の怪物。ここではラーダーのやきもちをさす)

ね、もう一度会えるかしら！ 死ぬほど愛しているあの方を、私は気のすむまで眺めることはできなかつた。そりゃ、ここに目は二つあるけれど、あの方の前になるとすぐパチパチまたたくし、涙が出て曇ってしまふし——。

あの方の頭にかざった孔雀の羽は、稲妻みたいに光るのよ。孔雀たちはあのお顔を見ると、羽をひろげて踊ったものよ。

ね、お友だち、私はもう生きちゃいられない——私のむくろをタマラの木の枝にのせて、体にクリシユナの名を書きつけておくれ！（訳註、タマラの木——黒い色の木、クリシユナ黒にかける）

聖ラーマクリシユナはおつしやる。

「あの御方とあの御方の名前は同じものだよ。だから聖（シューリー・マティ）女（ラーター）は、あんなふうに言うのだ。ラーマの名がラーマだ」

タクルルは前三昧状態で、この（マトウラーの歌をきいていらつしやる。ゴースワミーの歌い手は次々とうたいつづける。次の日曜日には南神寺院ドッキネーシヨルで、この歌がうたわれることになっている。その次の土曜にはアダルの家で、またこのキールタンが催される。